

音楽活動を通じた国際理解 —カンボジア日本友好学園・ACC との交流を通して—

坂井加奈

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 22 年 12 月 1 日受理)

International Understanding through Music Activity —Through the exchange of “the Cambodia- Japan Friendship school” and “Adirondack Community College”—

Kana SAKAI

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage*)

(Accepted December 1, 2010)

Abstract

Recently, the number of students who have the experience of international exchange has been decreasing, though it is indispensable to acquire the international sensibility. The school should provide an opportunity of international exchange for the students. And, the professor oneself should tell them the importance of international exchange. The author taught the chorus at the school in Cambodia. It is important to teach the happiness of music to a local child, and to give Japanese school students the chance to look back on themselves.

Key word : The international sensibility 国際感覚

Cambodia カンボジア

chorus class 合唱指導

I. はじめに

2004年度以降、日本から海外留学をする学生の数が年々減少しているという。その理由として、不景気による経済不安や就職活動の早期化、また海外に行かなくても満足な生活ができる現在の日本の生活環境が大きく影響していると推測される。また、莫大な情報量に溢れ、家にいながらにして様々なことができてしまう現代、我々は直接的な体験をしなくても物事の大半を理解できたような錯覚を覚えるようになってしまったのではないか。今や学生どころかさらに若い世代すら携帯電話やパソコン等の機器に慣れてしまい、自分達に与えられた環境に何の違和感もなく過ごしてしまっている。格差社会という言葉があるが、国内のことには目を向けられても、国際的な貧富の差等を意識する機会は彼らにとって非常に少ないようである。また最近の若年層によく見られる「内向き志向」に関しても、海外に興味を持てる環境作りをすることが我々の課題の一つといえる。

本学科の学生においても、英語が不得手ということも関係するのであろうが、「国際交流をしようとは思わない」または「する機会がない」という声が多数聞かれる。そもそも、なぜ国際交流が必要なのか。これは国家レベルの話に限らず、人が他者との関わりを持ちながら生きていく術を担うためでもあると著者は考えている。それが、ゆくゆくは人間形成や、長い目で見れば地域や産業の活性化へとつながっていくはずである。

国際交流は、子ども達を教える立場となる人間だからこそ特に経験してほしいことでもある。現に彼らが勤めるであろう幼稚園や保育所では、外国籍の園児を預かる機会も増えてきている。保育者になる彼らには「言語やそれ以外の手段でコミュニケーションする表現方法がある」ということ、さらにはその一つが「音楽」である、ということこそ是非とも知ってほしいと考えている。

著者は数年前、佐賀に滞在していたカンボジア人留学生達に「さくら」（森山直太郎作詞作曲）を指導したことから、今年3月現地の学校で音楽指導を行う機会に恵まれた。音楽という科目がまだ確立していないカンボジアの生徒達に、音楽をする豊かさや楽しさを伝えたいと願うのと同時に、そういった教員自らの体験を本学の学生に伝えることで、彼ら自身が自己を振り返るきっかけとなしてほしいと考えた。

また帰国後、幸運にも著者が本学で受け持つ講義にて、交換留学生と交流する機会をも得ることができた。そこで音楽による交流を実体験させ、少しでも国際感覚を身につけさせたいと考えた。

このように自らの体験を元に、最終的には学生へと還元していくことがこの研究の最終目的である。

II. 教員による実践

まず、著者が実施したカンボジアでの音楽指導について、概要を述べることにする。

1. カンボジアの教育環境について

カンボジアは1884年にフランスの植民地となり、1954年に独立を果たしたが、その後もベトナム戦争の拡大（1970～1975年）や、ポル・ポト政権（1975～1979年）、ベトナム軍侵攻による大量難民の発生（1980年代）等、絶えず混乱が続いた経緯を持つ。1998年に総選挙が実施されてようやく内戦が終結したが、復興が始まってからはわずか12年しか経っていない。

そのような情勢のため、教育環境もかなり遅れている。今でこそ首都プノンペンでは就学率も上がっているものの、田舎との格差は大きい。学校に行きたくても極度の貧しさのために行けない子どもは数多く、優れた能力を持ちながら進学できないという例も珍しくない。カンボジアの教育制度は、現在では12年（6+3+3）制度を導入しているが、ユネスコの報告によると、女子の就学率は男子よりもさらに低く、小学校47%、中学校40%、高校32%とのことである。

村の子ども達の生活はまだ貧しく、小学校に入学できたとしても途中で辞めてしまうケースも多い。勉強が理解できない、もしくは家計を支えるために働くことを余儀なくされているためである。そこで近年は、幼稚園の設立を支援する団体も増えてきている。幼稚園に通った子どもは小学校での学習や生活に早く対応でき、中途退学が減るという成果につながっているからである。カンボジア政府も「2015年までに5歳児の75%が就学前教育を受け、6歳からスムーズに小学校で教育を受けられるよう、就学前教育に力を注ぐ」と決めたことがある。しかし現在、カンボジア全土で公立幼稚園は1,907ヶ所、教育を受けている3～5歳児はわずか11%にすぎない。

就学率を上げていくにあたり、解決しなければならない問題は山積している。学校や教員の数が都会と田舎とでは差があることも問題の一つである。校舎は、各国の民間が建設を行ってきたが、教員や教科書、備品といったソフト面ではまだ充分に行き届いていない。生徒と学校の数が見合わず、一日二交代制を行っているところも未だ存在する。その他、教員の質、家庭の理解不足等も課題として挙げられる。

2. カンボジアにおける音楽文化事情

そもそも東南アジアにおいては、音楽がかつてどのようなものであったかという記録がほとんどないという。わずかな考古学的資料、例えば金属器、碑文、壁画、浮き彫りなどの図像および描写から、当時の楽器や踊りの

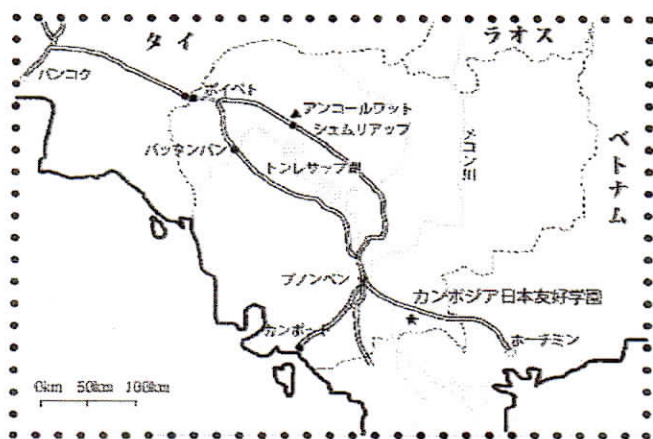
型についてはある程度知り得るが、その描写そのものが正確かどうかは疑問である。しかし音楽史料を欠くという点がむしろこの地域の特徴であり、それはもっぱら口頭伝承に頼り、音楽についての記述を残そうとする意識が希薄であると同時に、音楽の理論化もさほど顕著ではなかったことが伺える。そのため宮廷音楽だけでなく、民俗音楽の起源すらあまり知られていない。

カンボジアにおいては、12世紀頃建設されたアンコールワット遺跡に、音楽舞踊文化に関する史料、すなわち奏楽図が描かれているのが発見された。17世紀頃からは、隣国の一部の地域において西洋音楽が取り入れ始められるものの、カンボジアにおいてはアンコール王朝が崩壊し、文化の維持もままならなかった。19世紀中葉のアン・ドゥオン王の時代になって初めて、高度に発達したタイのラッタナコーシン王朝の音楽舞踊が逆輸入されたと言われている。さらに1975年からのポル・ポト政権下で芸術文化は壊滅的な危機に見舞われたが、1980年代後半から再興の努力が実って、文化活動もようやく活発になってきている。(種瀬 1996)

現在、東南アジア全土をみると、楽団や指揮者の交流等が進める国も現れ始めた。単に洋楽器を取り入れるのではなく、伝統音楽と合体させた新しい様式が現れている。しかしながらカンボジアにおいては、未だ西洋音楽の楽団といったものはほとんど存在せず、国民の音楽教育すらも必修とは言えない状況である。地域による格差がここでも見てとれる。

3. 「カンボジア日本友好学園」について

まず、訪問先となった「カンボジア日本友好学園」について概要を簡単に説明する。



【図1】近隣地図

【図1】に示すように、カンボジアの首都プノンペンから車で3時間ほど離れた、プレイヴェン州リング村に位置する。プレイヴェン州にはごく最近より隣国ベトナムから電力が供給され始めた。しかし経済的な理由より

電気を使える者はごくわずかであり、国民のほとんどが電気なしの生活を送っている。水道もまだ通っておらず、リング村でも井戸水を利用していた。

「カンボジア日本友好学園」は1998年に設立され、「カンボジア教育支援フロム佐賀」などの団体が維持運営のサポートをしている。カリキュラムはカンボジア教育省のもと決定されているが、教職員の給料サポートとして民間が参与しており、いわゆる半官半民の形をとっている。現在約800名の生徒達が通う、中高一貫校である。

友好学園はその成り立ちから日本との交流が盛んであり、日本からの教員派遣だけでなく、学園生の日本訪問等も行われている。また正規のカリキュラムではないものの、通年による日本語教育が全学年に対して週2時間実施されているという。

生徒達は農家出身が多く、長距離を自転車で通う者もいれば、学園の近所に友人同士で小屋を建て、共同生活をしている者もいる。朝礼は毎朝6時45分より行われ、7時より1限が始まる。授業時間は各50分間で、1日平均6コマ行われる。

カンボジアの学校では、教員の有無によって勉強できる科目が異なってくる。特に音楽はまだ必修科目として扱われていないため、専門外の教員が有志で教えているにすぎない。友好学園ではたまたま理科の教員が音楽に造詣が深いこともあり、数年前にコーラス部を結成して指導にあたっているということであった。しかし活動内容やレベル、楽譜や楽器の有無等については、訪問前に詳しく伺い知ることはできなかった。

4. 実施方法

まず、数ある音楽活動の中から歌唱を選んだ理由として、大きく2つ挙げられる。第1に、何の道具も持たなくとも、身体そのものを楽器にできることである。身体を表現媒体とすることで、自己の実存感を認識しやすい。第2に、声を出すという行為は、人間の内面と直結しているからである。我々は生まれた時から、何か人に伝えたいことがあって声を出す。情動や感情の動きが即、声となり外に出せることより、人間だけでなく動物全般が、表現の本質を元々備えていると言えよう(寺尾 2000)。

そして、全ての民族には言葉があり、歌がある。仕事や儀式、呪術の場面で古来より使われてきたのが歌であるため、最も身近で、国を超えて共通した表現手段ではないかと考えた次第である。

今回の主な取り組みは、コーラス部メンバーを対象に日本の歌を指導し、最終日に全校生徒の前で発表するというものである。また、互いの国の伝統的な遊びや歌を紹介し合う他、村の至る所に出向き、キーボード演奏と歌を披露して音楽で交流するといった活動も行ったが、

ここではコーラス指導についての記録のみにとどめる。

(1) 実施期間

2010年3月5日(金)～9日(火)

(2) 場 所

カンボジア王国プレイヴェン州リング村「カンボジア日本友好学園」図書館

(3) 対 象 者

中部部2年生コーラス部メンバー40名、高等部2年生1名(コーラス部リーダー)

(4) 学園滞在中のスケジュール

【表1】カンボジア日本友好学園滞在中のスケジュール

内 容	
1日目	ウェルカムコンサート・曲決め・練習①
2日目	授業見学・結婚式にて演奏会・練習②
3日目	練習③・日本語授業・P教員宅で演奏会
4日目	生徒宅訪問
5日目	リハーサル・発表会・校長宅で演奏会

(5) 活動記録

練習①

ウェルカムコンサートでは、まずコーラス部による発表が行われた。国柄なのか、歌う前に全員合掌し、指揮者の「ムオイ・ピー・バイ(1、2、3)」の掛け声で始まった。曲目は「アオ・スワイ・チャン・テー」と「デン・デイ・サックス」と説明されたが、後者はよく聴いてみるとドボルザーク作曲「交響曲第9番『新世界』」第2楽章のテーマであった。



【図2】「アオ・スワイ・チャン・テー」の冒頭

1曲目は最初に、鍵盤ハーモニカで2つのメロディを確認していたため、二声部で合唱ができることが判明した。おそらく民謡だと思われるが、彼らの歌声は日本の音楽教育の発声法とは異なり、かなりの高音でさえも地声で歌っていた。つまり普段の話し声と同じ喉の使い方をしていただろう。そのため、【図2】のように聴き取りを行ったものの、判別しがたい箇所が多少あった。しかしながらそのものすごい声量と土俗的な声質にはただ圧倒され、生きる力にみなぎっているような印象を受けた。あまりの衝撃に正直、彼らに西洋音楽仕込みの発声法で教えるのはナンセンスではないだろうか、という考えさえよぎるほどであった。



【図3】「デンデイ・サックス」のリズム

2曲目では、数人が前に出てきて民族楽器らしきものを並べ、鍵盤ハーモニカと合奏を始めた。日本語では「家路」や「遠き山に日は落ちて」というタイトルで親しまれている名曲だが、そのリズムは【図3】のように独特で、元々の曲の持つ「Largo」の雰囲気とはかけ離れたものであった。西洋音楽とは違う、カンボジア人特有のリズム感を垣間見た気分であった。

後に判明したことであるが、カンボジアの歌の様式は基本的には独唱か斉唱であり、音頭一同形式の応答歌や交互唱形式の掛け合い歌が主流である。また、東南アジアに共通した、最も根本的な音楽感覚は、五音音階を基本とし、二拍子が中心である。この「アオ・スワイ・チャン・テー」はまさにその代表的作品といえる。さらにリズムに関し、西洋とは逆に「弱・強リズム」が基本である(種瀬1996)。カンボジア流「新世界」の独特なリズム感はそのためだといえよう。

生徒による発表の後は著者の番となり、自己紹介もかねて演奏を披露することになった。学園には勿論ピアノはなく、日本から持参したキーボードをバッテリーにつないでの演奏であった。耳慣れない響きに誘われ、教室には外まで溢れんばかりの生徒が集まってきていた。時は乾季、木製の窓にはガラスがないため、鍵盤はすぐさま砂まみれになってしまう。故障の心配は絶えなかった。

プログラムには「ふるさと」、「さくらさくら」、「幸せなら手をたたこう」、「もみじ」、「月の砂漠」、「上を向いて歩こう」等を取り入れ、弾き歌いを行った。このコンサートは今回練習する曲を選んでもらうという目的もあったので、通訳を通して歌の意味も紹介した。選曲には想像以上の時間がかかり、二転三転のあげく日本古謡「さくらさくら」に決定した。そこで急遽、【図4】のように下声部も簡単にアレンジすることにした。



【図4】「さくらさくら」下声部冒頭

互いの顔合わせも終わり、通訳を通して判明したことがある。それは、1)発表日の数日後にプレイヴェン州主催の合唱コンクールを控えているということ。(ウェルカムコンサートで披露された曲は、ここで発表するためのものであった)つまり日本の歌にばかり練習時間を

費やせない、2) 訪問期間にはたまたま国民の休日が含まれており、ほとんどの生徒は実家に帰って手伝いをしなければならない、ということであった。

著者に与えられた指導期間は、わずか3日間と本番当日のみであった。コーラス部の意図としては、今後日本の歌をレパートリーにしたいため指導してほしいということであったが、日本で事前に得ることができなかった数々の情報に戸惑いを覚えた。著者としては、音楽をやるのが決して彼らの負担になってはならないという葛藤を感じたのも事実である。

その後初めての練習にて、音とり作業が始まった。楽譜はコピーを用意してもらえたが、彼らは五線譜を読めないで、著者がキーボードで音を鳴らし母音で歌ってみせた後、歌詞を付け加えた。全員、日本語授業を受けた経験を持つだけあって、発音は美しく聞き取りやすい。

練習②

毎朝6時45分から始まる朝礼では、校庭に整列し、生徒全員で国歌を歌う習慣があるという。遅刻した生徒も、いかなる場所にしようとその場で立ち止まり国旗掲揚の瞬間を見つめていた。生徒達の普段の様子を知るため、練習前に各教室の授業見学をしていると、コーラス部以外の生徒達からも「日本の歌を教えてほしい」と声がかかり、至る教室で講義を求められた。ローマ字で唱歌「ふるさと」を指導し、互いの国の伝統的な手遊びを紹介し合った。

この日の合唱練習は、上声部と下声部に分かれさせ、グループ毎に行った。下声部は単純な進行を用いた音程にしたため、音とり作業にはさほどの時間を要しなかった。しかし上声部のメロディとなると、勝手が違う。例えば【図5】に示した「はなざかり」の「ざ」には2つの音が含まれているため、母音で伸ばしながら音程を捉えることが全くできない。到着地点であるはずの「り」の音程はばらついており、全員で一つの旋律を歌っているとは思えないほどであった。



【図5】2つの音程（HとA）を含む「ざ」

彼らは英語をあまり理解できないようで、著者の説明もうまく届かない。著者の模倣をしようと試みているようだったが、あまり変化は見られなかった。高温乾燥の中、指導は連続3時間に及び、翌日も少し練習時間をとることになった。

練習③

この日は早朝から、「まねっこゲーム」と称し、著者が発する短いフレーズを復唱するといった試みを繰り返して行った。まずは3つの音から、そして徐々に音数を増やしていき、最終的にはリズムも加えていく。また、自分の目の前の空間を縦長に使い、下からド・レ・ミ…と手を使って「見えない目盛り」で区切らせ、それに合わせて声を調整することで音程を確かめさせた。いわばハンドサインのようなものである。著者自身も音の高さに応じて顔や手の位置を上下させる等、まさに試行錯誤であった。楽譜は使わず、生徒とのアイコンタクトだけで意志を通じ合わせるよう努めた。

気温は40度近いため、あまり長時間の拘束はできない。休息と水分補給をさせながらの練習であったが、何度も繰り返すうちに、長いフレーズもどうにか音程がとれるようになってきた。しかし、著者から目線を離れた瞬間、彼らの音程はたちまちずれてしまう。言葉が通じない分、身振り手振り目、そして感情を大袈裟に表すことでしか伝えられないもどかしさを味わった。

練習時間はあっという間に終わってしまい、生徒達を実家へと見送った。次に再会するのは、もう本番当日である。やむを得ない事情とは言え、このような短期集中的な指導法に、さすがに疑問を禁じ得なかった。果たして音楽をやるのが強制になってはいないだろうか、不安を感じた日であった。

リハーサル・本番

前日には練習を行わなかったが、数人のメンバーが自主練習をしている様子が見られていた。当日も早朝から歌声が聴こえており、指導者がいなくても自分達の力で音程がとれてきたことが遠く伺えた。

リハーサルで実際に歌声を聞いてみると、音程は正確にとれており、いつの間に覚えたのか全員暗譜で臨んでいた。その甲斐あって、メンバー全員が自信を持ってはっきりと発声できており、指揮をする著者の目を見つめながら歌うことで音程のずれも生じにくくなっているよ



【図6】カンボジア国歌

うであった。ようやく「二部合唱」に近づいてきたことを確信できた。

本番は「カンボジア国歌」(【図6】参照)、「君が代」、「さくらさくら」、「アラッピア」の順でプログラムし、全校生徒 800 名および教員陣の前で発表することとなった。「君が代」は、我々 5 名の日本人メンバーで歌った。この学園では、カンボジアと日本の 2 つの国旗を掲揚している。日本への信頼も厚いこともあり、このたびの取り組みが両国の文化の架け橋となれば、という意味もこめでの斉唱であった。【図7】の「アラッピア」は、カンボジアの祝いの席で必ず歌われる陽気な歌である。国歌と共に、以前カンボジア留学生に教わったものであった。



【図7】アラッピアの旋律

生徒達は大人数の前で披露することに慣れておらず、緊張の表情を浮かべているようだったが、「ニョニウム・モイ! (笑顔で)」と声をかけると、若干頬が緩み始めた。本番では、彼らはいきいきとした笑顔で歌い上げ、拍手の大喝采を浴びた。わずか3日間という期間で異国の歌を覚えて発表したことに、非常に誇らしげな表情をしていた。著者としては、翌々日に控えた州主催コンクールでの自信にしてあげたいという思いもあったため、ある種の達成感が感じられた。

5. 結果および考察

このように、最終的に発表会は成功に終わったが、その道のりにはいくつもの問題点が生じた。言葉が通じないという点では、幼い子どもへの指導と共通した部分を感じ、身振り手振りや表情での伝達がいかに有効かということに気付かされた。

また、経済的に恵まれていないカンボジアにおいて、彼らは勉強しなければならないことがたくさんあり、音楽が娯楽のように受け取られてしまうのではないかと、負担になっていないだろうか、という懸念は常に拭えなかった。しかし村全体が貧しく、その中で育ってきた彼らは、自分達が貧しいことを普段意識していない。他と比べる物差しを持った時、「貧しい」が初めて意識される。彼らはいつも明るく元気で、「貧しい中で必死に生きている人々」といったイメージは徐々に払拭されていった。発表後の彼らの反応を見た瞬間、音楽は日常生活

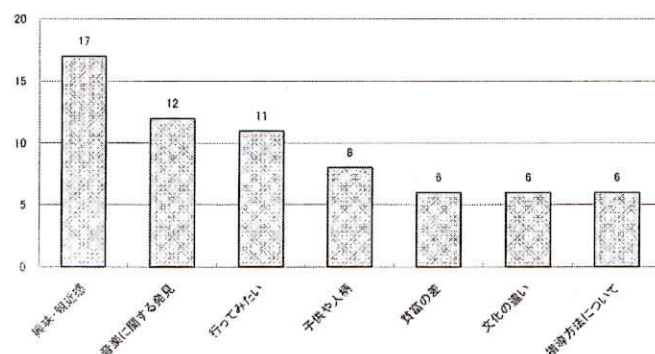
を豊かにしてくれること、そして彼らは音楽をすることに喜びを感じられる心の豊かさを持っていることを知った。日本とカンボジアという国の隔たりを全く感じさせず、我々は音楽を共通語として、心を通い合わせる交流ができたといえる。

後日伝わってきた情報によると、彼らは州主催合唱コンクールで優勝し、全国大会への出場権を勝ち取ったということであった。ただし実情は、州大会の出場校はわずか4校という広き門であったようだ。科目としての音楽が未だ認められておらず、コーラス部の存在自体も珍しい国では、仕方のないことかもしれない。しかし今回のような取り組みが、やがて他の地域や学校へと影響を与えていくはずである。そのきっかけ作りとして、多少なりとも貢献できたのではないだろうか。

6. 学生の感想より一考察

今回の体験を受け、帰国後、著者の講義にて写真や音声等を用いて発表を行った。以下、そこで実施したアンケート調査結果を記載する。尚、このアンケートは自由記述としており、彼らの着眼点別の割合を【図8】に示している。

【図8】聴講後の学生の感想より(着眼点別)



【図8】聴講後の学生の感想より(着眼点別)

- (1) 実施日時
2010年4月13日(火)「器楽表現」第1時間
- (2) 対象
西九州大学短期大学部幼児保育学科表現・音楽コース2年生46名
- (3) 回収率
100%
- (4) 調査結果

A. 興味・親近感 [17名]

- ・楽しかった・面白かった・興味深かった・興奮した。
[9名]
- ・カンボジアまで行って音楽を教えてきた先生に感動し

ました。〔3名〕

- ・カンボジアのことについて知ることができてよかったです。〔3名〕
- ・カンボジアの子どもたちに音楽を教えている坂井先生がすごく楽しそうでした。〔2名〕
- ・日本の国旗が立っているところやカルタで日本語を学んでいる子どもたちを見ていると親近感が沸きました。
- ・先生が歌の授業をしている写真を見て、とても素敵な写真だと感じました。
- ・先生がうらやましかったです。
- ・わかりやすかった。

B. 音楽に関する発見〔12名〕

- ・先生が生徒達と一緒に歌っている姿をみて、音楽というのは世界共通で楽しめるものなのだと感動しました。〔3名〕
- ・音楽を通して世界中の人と関わりを持つことができるなと思いました。〔3名〕
- ・言葉は違うけど、音楽を通して仲良くなれるんだなと思いました。〔2名〕
- ・私も音楽を通して他国の人達と関わってみたいと思いました。
- ・全く言葉も文化も違う人間でも、音楽を通して気持ちが通じ合うことが改めて分かり、やっぱり音楽は素晴らしいと実感しました。
- ・音楽のない国があると聞いて、とても驚きましたが、こうやって交流を深めていけたらいいと思いました。
- ・歌はどんな国にもあるのだと知りました。

C. 自分も行ってみたい〔11名〕

- ・カンボジア（海外）に行ってみたいなと思いました。〔7名〕
- ・自分は前から外国に行ってその国の子ども達と関わったり支援したりするのが夢だったので、すごく真剣に見ました。
- ・ずっと前から中東の子ども達と触れ合ってみたいという思いがあるので、とても楽しく見れました。
- ・将来私も機会があったら、世界中の学校を訪問したりしたいと感じた。
- ・海外の音楽や生活の様子などいつか私も行って研究などしてみたいなと思いました。

D. 子どもや人柄について〔8名〕

- ・ほとんどの子ども達が笑顔でした。見ているこっちにも楽しそうだということが伝わってきました。〔2名〕
- ・カンボジアの生徒は、ピアノとかにたくさん興味を持

っているようで、ピアノをさわっている様子は、とても楽しそうでした。

- ・学校の生徒達は積極的な子が多いと思いました。
- ・日本とはまったく違う環境の中でも、村の人達や子どもたちの笑顔が印象的でした。
- ・カンボジアのイメージはごみがいっぱいあって、家があまりないイメージでした。でも、学校や手作りの家があり、人々も温かい感じがしました。
- ・どこの国でも子どもはみんなかわいいと思った。
- ・子ども達がとにかくかわいくて、私も会ってみたいなと思いました。

E. 貧富の差〔6名〕

- ・写真を見ただけでも実際行ったわけではないのに、一部一部が貧乏の差が分かる状態で複雑な気持ちになりました。ものなどを大切に扱い、毎日のことがあたりまえと感じないように心がけたいと思いました。
- ・私たちは今、食べるものも豊富でカンボジアに比べるととても恵まれていると思います。でもそれを当たり前だと思わず、毎日に感謝して過ごしていきたいなと改めて思いました。
- ・日本とは全然違い、どれだけ私たちが豊かで便利な生活をしているのかが分かりました。
- ・あまりの生活水準の差に驚きました。
- ・世界に目を向けると、日本はとても恵まれている環境ということを改めて認識させられる機会となりました。
- ・日本からもっと支援をしていきたいと思いました。

F. 文化の違い〔6名〕

- ・文化の違いや音楽がないことを知ってびっくりしました。〔4名〕
- ・言葉や風習、環境など日本と違う点があり大変勉強になりました。〔3名〕
- ・カンボジアの写真や合唱を聞いて、日本文化との違いを感じました。カンボジアにはカンボジアで素敵な部分があると思いますが、音楽あふれる日本に生まれてよかったと思いました。
- ・日本とは全く違う文化があって面白かったです。

G. 指導方法〔6名〕

- ・言葉が異なる場所での授業（特に音楽）は難しそうだなと思いました。〔2名〕
- ・音楽がない国や音楽を勉強したい子どもたちに音楽を教えたいなと思いました。
- ・考え方によって子ども達の保育も同じかなと思うことにとっても共感しました。
- ・言葉だけで説明するのではなく、目を使ったり体を使

ったりして指導するやり方は勉強になります。
・教え方を苦勞されたようで、子ども達にもどう教えるかが大切だと感じました。

以上より、ほとんどの学生は普段異国について意識する機会がなく、このようなカンボジアの風景を見るのも初めてで新鮮に写ったようである。これまでにないほどの真剣な眼差しで、食い入るように見つめていたのが印象的であった。また「楽しそう」、「すごい」等の感想だけでなく、文化の違いや貧富の差、さらには音楽が世界共通のツールであることを意識させられたのは、私にとって大変有意義であった。世界に目を向け、幅広い視野と教養を身につけることは、保育者としても非常に重要である。今回のカンボジアでの取り組みは、現地の生徒のみならず、本学の学生の関心をも引き出せたという点においても有益であったと考えられる。

また、学生の感想の中で「今までに国際交流をしたことがない」という記述が多く見られたことが気になった。学生時代のうちから、異文化について理解し、国際感覚を身につけておくのは必須である。また教育機関では、そのような環境を設けていく必要がある。

後日、同一講義において、交換留学生との交流会を受け持つことになった。そこで実際に体験をし、その後彼らはどのような感想を持つのかを再び調査することにした。

Ⅲ. 学生による実践

1. 実践方法

佐賀市とアメリカのグレンズフォールズは姉妹都市であることから、本学ではACC (Adirondack Community College) と毎年交互に短期交換留学を行っている。今回は平成22年5月24日より1週間、ACCの一行が本学で過ごすということで、著者もホストファミリーを引き受けることになった。

そのプログラムの一つとして、著者の「器楽表現」の講義において音楽を通した交流会を実施する運びとなった。テーマは「日本の歌や遊びを紹介し、日本文化にふれながら交流を深める」である。

この講義において学生は普段、楽器の扱い方や編曲、合奏の方法を学んでいる。そこで各6人のグループ毎に、日本の代表的な幼児曲を選んで編曲・合奏させた。そして交流会の前にオーディションを行い、受講者全員の投票によって選ばれた2グループに、ACCメンバーの前で発表させることにした。詳細は以下である。

(1) 実施日時

2010年5月25日(火)「器楽表現」第7時間

(2) 対象

西九州大学短期大学部幼児保育学科表現・音楽コース2年生46名

(3) プログラム

- ① ACCメンバーによるスピーチ
- ② もんちっちジャンケンゲーム
- ③ 器楽合奏発表「線路は続くよどこまでも」「おもちゃのチャチャチャ」

2. 学生の感想より一考察

交流会の直後、自由記述によるアンケート調査を行った。尚、前回同様、【図9】に学生の着眼点別の割合も示している。

(1) 調査日時

2010年5月25日(火)交流会直後

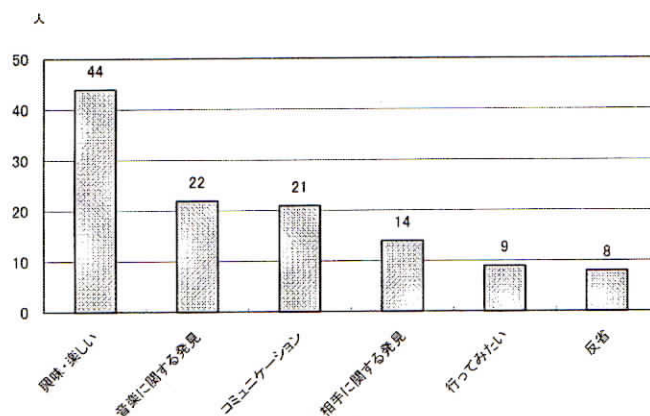
(2) 対象

西九州大学短期大学部幼児保育学科表現・音楽コース2年生46名

(3) 回収率

100%

(4) 調査結果



【図9】交流会後の学生の感想より(着眼点別)

A. 興味・楽しい〔44名〕

- ・とても楽しかったです。〔25名〕
- ・普段の生活の中ではできないことだった。(外国の方と接する機会がない)〔8名〕
- ・とても良い経験になりました。〔6名〕
- ・他国の人との交流もとても大切だと思いました。〔2名〕
- ・こういった授業は嬉しいです。〔2名〕
- ・みんな笑顔でした。

B. 音楽に関する発見 (22名)

- ・日本の曲でも外国でも知っている曲もあり、音楽は共通だと改めて感じました。〔6名〕

- ・音楽は国が違って一緒に楽しめるものだと思います。〔6名〕
- ・音楽を通してだと一気に仲良くなれたようで、音楽っていいなと改めて感じる事ができた。〔4名〕
- ・音楽と一緒にふれあったことで、たくさんの人と関わることができてよかったと思う。〔2名〕
- ・「線路」は英語詞もあって驚きました。〔2名〕
- ・出身地にゆかりのある曲だったり、知っている曲だなお仲は深まることを実感しました。
- ・音楽に国境はないのだと思いました。
- ・英語はほとんど会話にならないけど、手遊びつきの歌だと伝わっているように思いました。
- ・「もんちっち」も初対面の人とするのはとても盛り上がり楽しめて、改めていい遊びだと思いました。

C. コミュニケーションについて〔21名〕

- ・たとえ英語が話せなくても、ジェスチャーや音楽などでコミュニケーションがとれれば会話ができる・仲良くなれる。〔8名〕
- ・言葉は違って通じるものがあり、楽しかったです。〔4名〕
- ・自分の名前を教えたり聞いたりして、少し英語で会話できて良かったです。〔2名〕
- ・言葉が通じなくても、色々な面でたくさんのことが伝わり、すごい。びっくりしました。〔2名〕
- ・英語は得意ではないのに、たくさん話ができ貴重な経験ができたなと思いました。
- ・言葉は違って遊びの楽しさは同じだと思いました。
- ・話す言葉が違ってみんなが笑顔になれることはすばらしいと思います。
- ・言葉は全く分からなかったが、笑っていると楽しくなる気持ちは同じかなと思った。
- ・英語が通じなくても身振り手振りで何かを伝えようとする気持ちがあれば伝わります。
- ・私は英語が苦手なので、伝えたいことが伝わるか不安でしたが、笑顔で接してくれたのでとても嬉しかったです。

D. 相手に関する発見〔14名〕

- ・皆さんとても気さくで日本語も上手だったので、すぐに打ち解けることができました。〔6名〕
- ・初めは戸惑っていらっしゃったが、慣れてくるととても楽しんで参加されていた。〔5名〕
- ・みんなきれいで本当にいい人たちばかりでした。〔3名〕
- ・「もんちっち」では一生懸命歌や振りを覚えようとしていて、その姿がとてもかわいらしかったです。
- ・私たちの演奏をきいて、「すばらしい！」と言ってく

れたのが一番嬉しかったです。

- ・ACCの人たちは本当に明るくて元気で私たちが圧倒されそうだった。
- ・イメージと違いシャイな方が多くてびっくりしました。
- ・生で見る外国人は何か違う魅力を感じました。

E. 行ってみたい・やってみたい〔9名〕

- ・また機会があればゆっくり交流したいと思った。〔4名〕
- ・私も他国（アメリカ）へ行って交流してみたいです。〔3名〕
- ・外国の方との交流がめったにないのであつという間に時間が過ぎてしまい、もっと長く関わりたいと思った。
- ・アメリカの音楽の授業も受けてみたいと思いました。

F. 反省点・やや消極的な意見〔8名〕

- ・私は外国人の人達との交流が初めてで最初はとても緊張していました。〔4名〕
- ・長く話すとなるとどのように話せばよいか分からなくなってしまいました。
- ・もっと英語を勉強したいなと思った。
- ・交流って難しかった一日でした。
- ・私の隣に座ってきた人の動作が少し怖かったです。

交流会が始まる前は、あまり乗り気ではない学生も多く見られ、ゲームのデモンストレーションを選ぶ時も多少尻込みしていた。しかしACCメンバーが現れると、初めて接する外国人に興味し緊張しながらも、「相手のことを知りたい」と心を傾けようとする様子が感じられた。

「もんちっちジャンケンゲーム」は学生が普段から慣れ親しんでいる遊びということもあり、身振り手振りで教えようとする姿も目立ち、ACCメンバーからは「歌詞を教えてほしい」との発言も飛び出していた。音楽によって互いに気持ちもほぐれたのか、笑い声も上がり、最後には写真撮影まで行われていた。時間はあっという間に経ち、名残惜しそうに見送る学生からは「もう少し話したかった」、「明日また声をかけてみよう」等の前向きな発言が聞かれた。

アンケート調査結果にも、「言語以外でコミュニケーションがとれた」ことに驚き、「音楽の力を再発見できた」という意見が多く見られ、国際交流に対する自信を少しはつけてあげられたように思う。著者のカンボジア体験談に加え、自らによる実践を通じたことで、交流手段としての音楽を再確認することもできたのではないかと考えられる。

IV. ま と め

保育者は、保育現場にだけ精通していればよいというものではない。子ども達を取り巻く様々な環境にふれ、幅広い視野を持てる人材が求められている。また、己とは違う他者の存在を認め、理解し合うことが望まれる。

人は、己のみの孤立した社会だけで生きてはいけず、何かの組織に組み込まれている以上、他者との関わりを持ちながら生きていかなばならない。国際交流の体験を通すことで、国境を越えなくとも、日常生活の身近なものとのコミュニケーション能力も培っていけるのではないかと考える。

また「表現」とは、幼児期に限らず人間生活全般において必要不可欠であり、その重要性に関してはやはり実践を通さないことには理解しえないと感じた。音楽という表現方法が交流の手段となりうることを、今回学生に知らしめたのは大変有意義であった。保育現場でも未満児や障害を持つ子どもとのふれあいは多いため、言語を介さない表現方法について模索するよい機会を与えられたのではないだろうか。

学生の国際理解を深めるためには、社会全体は勿論のこと、最も身近な学校や教員自らが意識を高く持ち、現場へ反映させていく役目を担うべきだと考えている。それは、ゆくゆくは学生、そして未来の子ども達へと伝えられていくものと信じている。

最後に、このたびの研究は「カンボジア教育支援フロム佐賀」をはじめ「福岡カンボジア名誉領事館」、そして本学関係者のご理解、ご協力のもと行った。この場を借りて心より謝意を述べたいと思う。

V. 参考文献

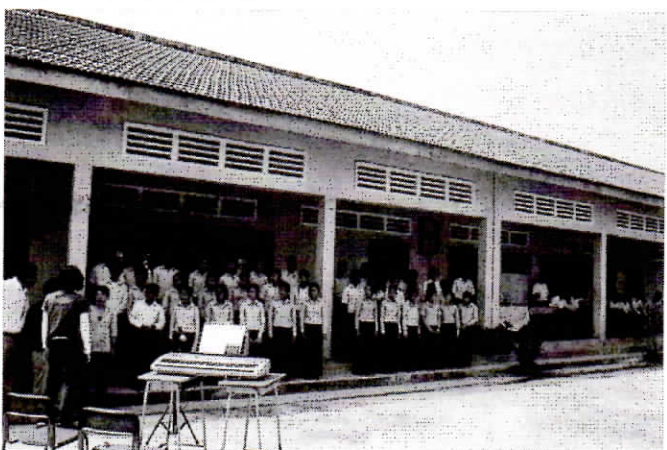
1. 今川幸雄：『現代カンボジア風土記』，連合出版（2006）
2. 波田野直樹：『キリング・フィールドへの旅 カンボジアノートⅡ』，連合出版（2006）
3. 『地球の歩き方』，ダイヤモンド社（2009）
4. カンボジア日本友好学園友の会ニュースレター
5. 寺尾正（中等科音楽教育研究会編）：『中等科音楽教育法』，音楽之友社，P.62～63（2000）
6. 種瀬陽子（拓植元一、植村幸生編）：『アジア音楽史』，音楽之友社（1996）



【写真1】練習風景



【写真2】キーボードと戯れる休憩のひととき



【写真3】緊張感漂う本番前



【写真4】猛暑の中、木陰に寄り添って見守る生徒達の姿が



【写真5】「アラッピース」は次第に踊りの渦へ



【写真6】もんちっちジャンケンゲーム



【写真7】ACCの仲間達と